博物館と郵便局の連携を通じて

前川　英樹*

「学芸員という仕事は街づくりのコアとして無限の可能性がある。将来、それぞれの勤務地で地域の期待を背負い地域住民の先頭に立って未来の街づくりへ挑戦してください」…博物館実習生へ送ったメッセージ。

2025年８月29日、昨年に続き私の職場、釧路桜ヶ岡郵便局に５名の実習生が見学にいらっしゃる。日頃よりお世話になっている石川学芸主幹からのオーダーはお断りできる状況に無く、しかもいつでもハードルが高い。高卒でしかも無学の私にとって全国の有名大学に所属し、しかも自費を投じて学びにやってきている学芸員を目指す学生たちに対し、私自身が先生となり何を語っても、もはや失笑を受けることは自明の理。

それでも任務遂行のため、まずはそもそも学芸員とは？あらためて文化庁のWebで検索してみた。

学芸員の資格取得には、大学か短大を卒業、また「博物館概論」など博物館に関する所定の科目を修得する必要があり（短大卒の場合は、加えて３年以上学芸員補として職にあること）、これには博物館実習の単位取得も必須となっている。あるいは「学芸員資格認定を合格したもの」とある。

さらに学芸員のプロを目指すためには、難関が次々と待っている。知識や経験もさることながら、何よりその道を究めたいという「プロ根性」が備わっていないといけない。かつて、サッカー日本代表としてワールドカップで活躍した本田圭佑氏が「子どものころ、自分より足が速くサッカーが上手な子どもはたくさんいたが、みんな途中でサッカーをやめてそれぞれの道へ進んでいった。自分は足が遅くへたくそだったけど、最後まで続けてきたから今がある」と語っている。プロへの道とは、挫折や困難を乗り越えて次のステージへ挑み続ける情熱が大事だと思う。

さて、私は2004（平成16）年４月に郵便局長としてフィッシャーマンズワーフ郵便局へ赴任、ちょうど戦後60年の年でもあり同施設内で「戦後60年釧路空襲のパネル展」を開催した。その時にお世話になったのが戸田学芸員、そして時を同じくして、伊能忠敬の地図展が同年７月に釧路市観光国際交流センターで開催され、それをきっかけに出会ったのが石川学芸主幹（当時は大学院生）、一期一会とはまさにこのことである。

戦後60年のパネル展では、ツテもないまま勢いで博物館へ押しかけたところ、戸田学芸員の誠実な対応で開催にこぎつけ、予想以上の反響があり新聞各紙で取り上げられる。当初、商業施設内でサテライト展示など考えられないと批判的な声が多かったが、好評を得られたことで賞賛の声が大勢を占めた。「傍観者の非難は成功することで賞賛する側に変化する」と言われるが、まさにそれを体感した機会でもあった。また、同郵便局在任５年間では「ラッコのクーちゃん」や幣舞橋の夕日を「世界三大夕日」と話題作りにも学芸員のみなさまのアドバイス、人脈のつなぎなど、その時々で学芸員のみなさまの縁者たちが支援の輪を広げてくれた。一期一会の発展形である。

その後、私は釧路愛国郵便局へ異動となる。世間的には「普通の街にある小さな郵便局」である。何気ない変化のない日常の中で、挑戦したのが「風景印」の作成である。風景印とは、ご当地の名勝、景勝地などを印面にデザインされ、押印する「公印」である。1931（昭和６）年の富士山郵便局・富士山北郵便局が始まりで、釧路管内では1932（昭和７）年３月に舌辛（現：阿寒）郵便局が第一号となる。当時の時代背景は、国立公園法が制定されるなど戦前の観光ブームにあやかり始まったといわれる。その愛国郵便局でデザインに登用したのが「雄別炭鉱鉄道」、地域の創世記を知る町内会役員からの要望も受け、私自身はじめての風景印制作に着手する。

しかし、意匠（デザイン制作）の経験がなく難航しているときに、雄別炭砿鉄道をはじめとする釧路の炭鉱を調査研究してきた石川学芸員より「私が支援しましょうか」と申し出を受ける。実は、石川さんは大の手紙ファンでもあり、風景印の意匠作成をするのが夢でもあったという。そうして雄別の歴史と文化を織り交ぜて制作した風景印（10ページ参照）は大変好評を得た。愛国地区には雄別閉山後の移住者が数多く、同時開催のパネル展の前で思い出話に花が咲き、雄別地区の同窓会のような状況でもあった。

なお、風景印意匠に採用したＳＬ「8722」は、釧路製作所（釧路市川北町）正面玄関前に今なお大切に静態保存されている。釧路製作所もまた創業の原点は雄別炭砿だった。

続いて局長として私の３局目の赴任地、イオンモール釧路昭和内郵便局での博物館学芸員とのコラボ企画は、JR３線（根室本線［釧路～白糠］、釧網本線、花咲線）が同時に2021（令和３）年に120年、100年、90年を迎えるという節目に沿線50局の小型印スタンプラリー企画。ちなみに、小型印とはいわば記念消印で、「特別小型日付印」として1902（明治35）年に第一号が誕生後、釧路

明治40年の開通記念
記念印を復刻した小型印
（2021年7月20日～2022年7月19日）

＊釧路桜ヶ岡郵便局長・釧路市立博物館友の会副会長

企画展「釧路の郵便150年」（2024.11.30～2025.3.9）

管内の第一号と思われるデザインが「1907（明治40）年」に、旭川～釧路間の鉄道開通を記念したもので、当時の官報でも告知された歴史がある。また、このイオンではモール内にサテライト展示コーナーの設置をしたいという商業施設からの申し出にも対応した。くしろバスの「100番」系統はイオン昭和→イオン釧路→博物館で、この路線でつながったのも不思議な縁だ。

そして私は2024（令和６）年より釧路桜ヶ岡郵便局に勤務している。ここでのミッションはいうまでもなく「石炭の歴史と文化を学び後世に伝えること」である。正直、十勝出身の私にとって初めて勤務する桜ヶ岡地域の歴史はまったくの門外漢、「上町（うわまち）・下町」の意味すら理解していない所謂「ズブの素人」、しかし、言うまでもなくここは石川学芸主幹のホームグランド。さっそく地域について猛勉強。「黒船来航…」「箱館開港…」「岩見浜から始まる釧路の石炭の歴史…」「1954（昭和29）年桜ヶ岡斜坑…」何もなかった草野原の桜ヶ岡・興津・益浦地域に住宅街が形成される。1957（昭和32）年１月16日、地域住民の要請（請願局：地域住民からの要望を受けて郵政省として新たに郵便局を設置すること）を受け開局したことなど、学ぶほどに街への愛着心が高まる。そしていつの間にか「昔から知っていました！」の如く、石炭のことについて語っている自分がいる。そして、1874（明治７）年から150年という節目を迎え、その歴史を振り返る博物館企画展「釧路の郵便150年」と「釧路中央郵便局を探検＋郵便屋さんのお昼ごはん」を始めとする関連行事の開催。

「釧路の郵便150年」小型印
（2024年11月29日～2025年11月28日）

学芸員との出会いから20年、４局での時間は、博物館と学芸員、そして博物館友の会の支えがあってのこと。つながりは人生の宝。

さて、長々と私と学芸員のみなさまのつながりを振り返ってきたが、学芸員実習生のみなさまに当日、伝えたことは、この振り返った話題そのものである。学芸員の研究とは、世の中を元気にし、未来の街づくりのヒントがふんだんに隠されている。しかし、それは密室で広がるものではなく一人で広げることは難しく、人々とのつながりを広げていくことでしか成しえることはできない。今回の５名の学生さんは、それぞれ違うジャンルを専攻し就職活動は全員がこれからだという。

全国各地に学芸員がいて、さまざまなジャンルの調査研究を行っているが、「なりたい！」と言ってなれる仕事ではないのが学芸員。専攻する分野の学芸員募集が常にあるわけでもなく、断念して他の道に進む人も少なくないという。

そうしてようやく希望が叶い学芸員としての活動が始まったら、大切にしてほしいことは「自分はこの調査研究を通じて何を成し遂げたいのか」という目的意識を持つことである。

スマホの普及とともにデジタル全盛期の時代、掌にあるスマホで世界中の情報を得られるようになった（が、その投稿にはフェイクが多く信頼性が低い）。現代人が触れる１日の情報量は、平安時代を生きた人々の一生涯分に相当するという。何という膨大な情報量なのだろう。しかしそれを受ける人間自身が成長しているわけではない。ある歴史考察学者によると、人の能力は人類誕生から変化していないが、デジタルの進化は人間の考える力を削いでいるという。

運動不足で体力が落ちるとさまざまな健康障害を発症するように、頭を使わないと思考力が損なわれ心の病につながると言われる。近年、その委縮した心の健康回復効果があるとして、「博物館浴」という考え方も出てきた。現代社会が抱える課題解決に、博物館で心を整え学ぶことが医学的にも効果絶大だという。

そして冒頭のメッセージ「学芸員という仕事は街づくりのコアとして無限の可能性がある。将来、それぞれの勤務地で地域の期待を背負い地域住民の先頭に立って未来の街づくりへ挑戦してください」。これを最後に伝えて当局見学を終えたことを報告する。

最後に筆を置くにあたり、博物館と博物館友の会のみなさまと新たな活動をスタートするＰＲをさせていただきたい。この11月より、絵手紙体験教室「ミュージアムサークル絵手紙」を開講することとなった。絵手紙とは「絵のある手紙を送ること」で、愛好者は100万人と言われている。絵手紙は「頭と心を使い、腕を動かし、歩いてポストイン」という一連のアナログ作業が人間力を磨き育てると言われる。（創始者曰く人育）、「ヘタがいい　ヘタでいい」がモットーの絵手紙をぜひ体験してほしい。さらに、博物館体験のきっかけとして、人を元気に！自分を研ぐ！絵手紙のチカラで出来る人間力向上、ぜひ一度体験してほしい。絵手紙のステキな世界をぜひ体験しよう。